

令和3年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

1 附属高等学校平野校舎の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

(2) 所在地

大阪市平野区流町 2-1-24

(3) 学級数・収容定員

9 学級 (1 学年 3 学級) 収容定員 360 人 (1 学級 40 人)

(4) 幼児・児童・生徒数

358 人 (男子 142 人・女子 216 人)

(5) 教職員数

校長(併任)1、校舎主任(併任)1、副校長1、主幹教諭1、教諭22(うち任期付教諭2)、養護教諭1、中学校併任教諭4、非常勤講師12、ALT2、事務補佐員5、用務員2(うち中学校併任1)

2 附属高等学校平野校舎の特徴

1 学年 3 クラスの小規模校である特徴をいかし、生徒一人ひとりの個性を伸ばし、幅広い学力の向上、自主自立の精神の涵養に取り組む。文部科学省の「ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム構築支援事業・拠点校」に指定され、国内外の高校や大学、関係機関と連携したカリキュラムととして、多様性を尊重し、グローバルな課題解決に向けて行動するイノベティブなグローバルリーダーの育成に取り組んでいる。

3 附属高等学校平野校舎の役割

- (1) 大阪教育大学と連携し教育研究に取り組むとともに、平野五校舎の共同研究を進める。
- (2) 本学の教育実習機関として実習生を受け入れ、適切な指導を行う。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てる。
- (4) 本学が行う現職教員の再教育の一端を担う。

4 附属高等学校平野校舎の学校教育目標

- (1) 学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格の育成
- (2) 国際的視野に立ち自他を敬愛する人格の育成

5 附属高等学校平野校舎の学校教育計画

○学校教育計画

各教科の確実な学習内容の定着と課題探究学習による実践的行動力の伸張を実現する教育課程を構築し、国内外の大学・高校等と連携しながら、「多様性を尊重し、グローバルな問題解決に向けて行動するイノベティブなグローバルリーダーの育成」に取り組む。

- 【1】小規模校の教育環境をいかした一人ひとりの生徒理解に基づく、教科指導、進路指導等の充実
(重点目標)

- (1) 小規模校の教育環境をいかした教科指導の充実と生徒の学力の向上

- ①新学習指導要領に向けた授業研究と評価法の検討 ②生徒のニーズに応じた学習支援
- (2) 生徒理解に基づくきめ細かな進路指導、生徒指導

- ①進路研究部を中心としたガイダンス機能の充実 ②学年団や生徒指導部、スクールカウンセラー等を中心とした相談機能の充実

【2】SGH及びWWL拠点校のカリキュラムによる、社会的課題の創造的な解決力・実践的行動力の伸張

(重点目標)

- (1) SGH及びWWL拠点校としてのカリキュラム開発

- ①学校設定科目のカリキュラム開発 ②大学と連携したプログラムの実施 ③オンラインを活用した海外関係機関との交流、高校生国際会議の開催

- (2) イノベティブなグローバル人材育成に関わる評価開発

- (3) WWLのALネットワークの活動充実と事業成果の発信

【3】学校行事や部活動等をととした、自主・自立の精神の涵養

(重点目標)

- (1) 学校行事、部活動の自主的運営の支援

【4】新型コロナウイルス感染防止対策を含む学習環境の充実、保護者・地域との連携

(重点目標)

- (1) 学習環境の維持・向上

- ①感染防止対策を含む安全な学習環境の維持・向上

- (2) 保護者・地域との連携

- ①保護者や地域への学校情報の提供 ②地域との連携

【5】大阪教育大学や平野地区附属五校園との連携・共同研究、部活動運営に関する将来検討

(重点目標)

- (1) 大阪教育大学及び平野地区附属五校園との連携

- ①大阪教育大学との連携 ②平野地区五校園共同研究の推進

- (2) 部活動運営に関する将来検討

- ①地域と連携した部活動支援体制の整備

6 附属高等学校平野校舎 令和2年度重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	学力の向上をめざす健全で創造性豊かな人格の育成 国際的視野に立ち自他を敬愛する人格の育成
学校教育計画	各教科の確実な学習内容の定着と課題探究学習による実践的行動力の伸張を実現する教育課程を構築し、国内外の大学・高校等と連携しながら、「多様性を尊重し、グローバルな問題解決に向けて行動するイノベティブなグローバルリーダーの育成」に取り組む。 【1】小規模校の教育環境をいかした一人ひとりの生徒理解に基づく、教科指導、進路指導等の充実 【2】SGH及びWWL拠点校のカリキュラムによる、社会的課題の創造的な解決力・実践的行動力の伸張 【3】学校行事や部活動等をととした、自主・自立の精神の涵養 【4】新型コロナウイルス感染防止対策を含む学習環境の充実、保護者・地域との連携 【5】大阪教育大学や平野地区附属五校園との連携・共同研究、部活動運営に関する将来検討

年度重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (＊評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
【1】(1)小規模校の教育環境をいかした教科指導の充実と生徒の学力の向上	新学習指導要領に向けた授業研究と評価法の検討	・各教科において、探究的な学び(課題発見や論理的思考、発表等)を重視した授業開発を行った。また、昨年度作成した主体性を評価するコモンリーブリックを教科の評価に活用する取組を始め、2つの教科の実践事例を公表した。 ・情報端末機器を拡充させ、生徒・教員の活用環境が充実した。ICTを活用した授業が増えるとともに、生徒への教材提供、教員の授業研究への活用事例が増えた。	評価法に関する教員研修により共通認識を醸成し、次年度以降も研究と実践、発表を行う。	A	・評価法の研究と、評価と指導の一体化に関する実践を期待する。 ・探究的な学習が各教科で導入されている。	A	・教員間の授業観察を継続するとともに、評価法及び評価と指導の一体化について研究を進める。 ・生徒に評価基準を示し学習効果を高める。
	生徒のニーズに応じた学習支援 ＊授業に関する生徒の肯定的意見 85%以上	必要に応じたオンライン授業を年間を通して実施し、生徒の学習を支援した。また、土曜授業と早朝・放課後等の補習、個別指導により、個々の生徒の学習ニーズに応じた。 ＊生徒アンケートの結果「教員は授業を工夫している」87% 「自分の考えをまとめたり発表したりする機会がある」90% 「補習や土曜補充授業を通して授業充実を図っている」84%	情報端末を各自所有する1年では、授業や教材提供等による活用を図った。	B	個々の生徒の学習を促すICT活用を推進するとよい。	B	ICTを活用した授業実践をさらに進め、事例を教員間で共有する。

【1】(2)生徒理解に基づくきめ細かな進路指導、生徒指導	進路研究部を中心としたガイダンス機能の充実 * 進路指導に関する生徒の肯定的意見 85%以上	各学年に対する進路ガイダンスの精査を継続して行った。特に3年では、進路相談を個別に繰り返し行い、充実を図った。 * 生徒アンケートの結果「学校では進路について考える機会がある」94%	卒業生によるガイダンスを昨年度に引き続き充実させた。	A	探究的な学びが進路選択や進路実現にいかされている。	A	グローバル探究と進路指導を連携させながら各学年の進路指導を点検・改善する。
	学年団や生徒指導部、スクールカウンセラー等を中心とした相談機能の充実	学年会、委員会、職員会議での定期的な情報共有を図るとともに、スクールカウンセラーによる相談体制の整備を行った。	スクールカウンセラーによる相談日を拡充した。	B	外部の関係機関との連携をより充実させるとよい。	B	外部機関との連携を進めるとともに、相談しやすい環境を整備する。
【2】(1)SGH、WWL 拠点校としてのカリキュラム開発	学校設定科目のカリキュラム開発	課題研究「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ」「データサイエンス基礎」「グローバル探究英語」等の科目は計画通り実施できた。また、2年の課題研究では高校生国際会議等、校外で発表する生徒が増えた。	昨年度の課題を踏まえ、1,2 年とも授業内容を改善し実施した。	A	文献やデータを活用した考察を促す指導を充実するとよい。	A	文献やデータ等を活用した考察を促す指導方法を工夫する。
	大学と連携したプログラムの実施	・大阪教育大学留学生との「多文化理解講座」(1,2 年)や留学生とのオンライン会話「Lunch Time Chat」(希望者)を実施した。 * 生徒アンケートの結果「他国について新しい事柄が学べた」100%、「英語学習の意欲が高まった」89% ・大阪大学、大阪教育大学の授業を受講・修了した(各12名、8名)。	留学生とのプログラムでは、生徒の課題意識に即した内容で意見交換ができるよう配慮した。	A	「多文化理解講座」や「Lunch Time Chat」は各国の理解と英語学習への意欲喚起に役立っている。	B	「グローバル探究」等との関連性を一層重視した内容とする。
	オンラインを活用した海外関係機関との交流、高校生国際会議の開催 * 講演や体験活動等の学習に関する生徒の肯定的意見 85%以上	・海外研修中止に伴い、海外5ヶ国と結ぶオンライン研修を行い、現地から社会課題等の講義聴講と意見交換を行った(1,2 年対象、計5回)。 ・高校生国際会議を生徒の運営によりオンラインで実施し、国内・海外の連携校の生徒(14校、約700名)が参加した。2年の生徒14班が英語で研究発表を行った。 * 生徒アンケートの結果「講演や様々な体験活動など授業以外の学習の機会がある」87%	・オンライン研修は、生徒の課題意識が深まるよう、現地と中継しながら実施した。 ・高校生国際会議では、大学と連携しオンライン環境を整備した。	B	・オンラインを活用したプログラムが充実している。 ・来年度の高校生国際会議は、さらに生徒が主体となり実施するとよい。	B	・「グローバル探究」等との関連性を一層重視した内容とする。 ・連携校等との共同研究を推進する。
【2】(2)イノベティブなグローバル人材育成に関わる評価開発	イノベティブなグローバル人材育成に関わる評価開発	大阪教育大学と協働し、全学年の PROG 調査及びイノベティブマインド評価を実施し、カリキュラムの改善に活用した。	評価開発担当者と大学担当者との連携・協働を強化した。	B	評価結果をいかしたカリキュラム研究を期待する。	A	生徒の変容分析と並行し、各プログラムの評価と分析に取り組む。
【2】(3)WWL の AL ネットワークの活動充実と事業成果の発信	WWL の AL ネットワークの活動充実と事業成果の発信	・全国の教育関係者を対象とした研修会をオンラインで開催し、本校での授業実践を発表した(11 月)。 * 参加者のアンケート「発表内容は勤務校等で役立つ」100% ・本校及び大阪教育大学のホームページに、生徒の活動状況や1年間の実践報告書を掲載した。	研修会では、多くの学校で活用できる学習ツールと授業実践を提供するよう留意した。	B	研修会の内容は学校現場のニーズでもあり、継続するとよい。	A	学校現場で活用できる研修となるよう、一層工夫する。

【3】(1)学校行事、部活動の自主的運営の支援	学校行事、部活動の自主的運営の支援 * 学校行事に対する生徒の肯定的意見 85%以上	・体育祭・文化祭では、感染防止対策を踏まえた行事運営のプランが生徒主体で作成され、学校と協議しながら実施された。 ・生徒指導部と総合型地域スポーツクラブが連携し、部活動の支援を行った。 * 生徒アンケートの結果「学校は、学校行事や部活動などを通して生徒の活動が活発になるようにしている」86%	昨年度の体育祭・文化祭等の諸課題を踏まえながら、助言や支援を行った。	A	感染状況に対応しながら各行事が実施されたことはよかった。	A	引き続き、生徒が主体的に活動できるよう環境整備や支援を行う。
【4】(1)学習環境の維持・向上	感染防止対策を含む安全な学習環境の維持・向上 * 学校行事に対する生徒の肯定的意見 85%以上	・感染防止を講じながら教育活動を行うとともに、全教室壁面等の抗菌処理施工、空調・換気機器の洗浄等、安全な環境づくりに努めた。また、グラウンド施設や部倉庫の新設、通学路や庭園等の改修を PTA 等と連携し実施した。 * 生徒、保護者アンケート「学校の施設・設備は事故防止・安全面で満足できる」生徒 85%、保護者 92%	中学校と連携し、保護者の協力も得ながら進めることができた。	A	保健所等と連携を図り対策が講じられている。	A	感染防止対策の徹底や老朽化した施設設備の点検・修理等により、学習環境の向上を図る。
【4】(2)保護者・地域との連携	保護者や地域への学校情報の提供	PTA と連携し、学年 PTA や保護者対象進路ガイダンスをオンラインで開催した。保護者への文書や一斉メール配信、ホームページによる情報提供に努めた。	ガイダンスの方法や配信環境についてPTAと連携した。	B	PTAと連携を図り、中止せずに実施できたことはよかった。	B	ホームページの改訂等により保護者への情報提供を充実させる。
	地域との連携	より日常的な場面でも防犯・防災に向けて対応できるよう、訓練の場面を変えて実施するとともに、個々に判断し適切に行動できるよう考察させた。	警察、消防署との連携を強化し、専門的助言を組み入れた。	A	今後も五校園と地域との連携を深めてほしい。	A	五校園と地域の行政や関係機関との連携を進める。
【5】(1)大阪教育大学及び平野地区附属五校園との連携	大阪教育大学との連携	・WWL 事業及び平野五校園共同研究等について、大学と連携・協働し計画通り実施した。 ・連合教職大学院生の実習受け入れ及び教育実習(五校園連携型教育実習も含む)等を計画通り実施した。 ・大学と附属学校教員の合同発表会で本年度の研究・実践を発表した(5 件)。	大学とオンライン会議を通して緊密な連携を図った。	A	今後も、大学と高校、平野五校園との組織的連携を進めることが重要である。	B	次年度も大学と連携しながら事業や教育実習等を行っていく。
	平野地区五校園共同研究の推進	五校園連携による「探究的な学習に関する研究」の初年度として、各校園の教員と協働するとともに、昨年度作成した主体性コンモノリブリックを踏まえた評価について、教科の取組を発表した。	各校園でのコンモノリブリックの活用事例を共有し、報告書にまとめた。	B		A	五校園が連携し、探究的な学習のカリキュラムづくりに取り組む。
【5】(2)部活動運営に関する将来検討	地域と連携した部活動支援体制の整備	地域等と連携したスクール・コミュニティクラブの活動として、ヨガ教室やトレーニング講習会、小学生遊び教室等を開催した。これらの活動は先進的な取組として文科省(スポーツ庁)等から取り上げられ、複数の地域・団体から視察等もあった。	総合型地域スポーツクラブ「ひらの倶楽部」が設立され取組を進めた。	A	平野五校園の特色ある取組として継続してほしい。	A	関係機関と調整しながら事業を推進する。